

Trial & Error

No.256

November - December 2006



——1979年の後半、地雷原を越えてタイに流入するカンボジア
難民の報道は世界を揺るがし、日本でも多くの活動と団体が始
動しました。私も、気がつくと一ボランティアとして、この潮
の流れに飛び込んでまいりました。

前代表理事 熊岡 路矢

特集・JVC 代表交代

時代に流されず、 時代に向き合い、時代を創る。

——「今という時代はどこか狂ってしまっているのか」という
問いかけと、「NGOとは何なのか」という問いかけとは、表裏
一体なものです。この問いかけの先にしか、今という時代にお
けるNGOの役割は見えてきません。そして、私たちの信じる
未来の希望も。

新代表理事 谷山 博史



に向き合い、時代を創る。

なのかな、「時代」というのは「歴史」と読み換えてもよいのだろうか——。
新旧の代表に、それぞれの思いを語ってもらった。それを読みながら、こんな感想
実践者として、この時代をどうとらえ、時代とどう向き合うのか。そこから浮かび上
うというものなのか。「時代」が“たすきわたし”され、実践が積み重ねられ、歴史が
れからもよろしく。谷山さん、ご苦労かけますネ。(編集部：大野和興)



前代表理事

熊岡 路矢

村と戦場、二つの前線に立って 考えてきたこと

前代表理事 熊岡 路矢

一九七九年の後半、地雷原を越えてタイに流入するカンボジア難民の報道は世界を揺るがし、日本でも多くの活動と団体が始動しました。前段の活動と準備段階を受けて、翌八十年二月にJVC＝日本奉仕センター(当時)が、バンコクの日本人会内で発足しました。

やはり報道に触発されて、七九年秋頃から難民救援に関わろうとした私も、気がつくともボランティアとしてこの潮の流れに飛び込み、それから二十六年、思い切って活動させていただいたことを、支えて下さった数多くの方々に感謝申し上げます。

■三つの時代にまたがって

私がJVCに参加した時代は、世界的に三つの時代に分かれる。カンボジア／インドシナ難民とJVCの発足

「冷戦構造」＝東西(ソ連と米国)対決の時代である。この冷戦体制は、四〇年代後半から始まり、九〇

く九一年のソ連の解体などをもって終焉した。局地的代理戦争の多くの犠牲者と深い傷が残された。

「冷戦構造」の崩壊以後

軍縮と平和の時代が来ることが期待された。九一年のカンボジア和平や、九二年のリオデの環境会議などで、市民(NGO/CSO(市民社会組織)など)の声が、政府や国連の政策などに反映される、という期待も持てた。しかし、イラクによるクウェート侵攻と「湾岸戦争」、旧ユーゴスラビアの解体に伴う、新たな形態の紛争が生まれた。紛争の本質は「民族・宗教対立」としての説明されることが多いが、根底には、異文化への憎しみを利用・増幅した、権力、土地、(水、石油などの)資源争いがある。

「九・一一事件」とその後

依然として、〇一年の「九・一一事件」は謎である。陰謀説をとらな
いとしても、米国家予算を毎年一兆円規模で使う治安のための情報収集・分析(自慢の「エシユロン」＝IT情報収集システムも含め)が働

かなかったのか。そして急情なのか、故意なのか、いくつもの重大な兆候が見逃されたのはなぜか、など疑問は多い。事件の犠牲者の多さ、視覚的な衝撃の大きさも含め、米国では「復讐」への感情が意図的にも煽られた。

現在は、この米国の戦争政策(本国内でも批判が高まってきている)によって、世界が規定されている。例をあげれば、アフガニスタンとイラクに対してとられた軍事行動では、直接にも、間接的にも多くの犠牲者、被害者を今も毎日のように生んでいる。米国は、過去の協力関係から、「アル・カイダ」(「九・一一事件」の主犯とされる)的なものとも、イラク、サダム・フセイン政権とも意思疎通の回路は持っていないはずである。

■「新しい戦争」に直面して

九五年の代表(当時はまだ任意団体就任時点。もともといわゆる「現場」の活動に興味があつて関わったJVCで、総合管理職のような代表の任につくのはためらいがあつたが、諸般の事情で、逃げるわけにはいかなかった。〇二年までは、今回代表理事となる、谷山博史さんが事務局長として支えてくれた。

九〇年代半ば、JVC内の複数の思いが錯綜し、不明確になった太軸を確認するための、整理・再編成の

時代に流されず、時代に

キーワードは「時代」
JVC 代表が交代する。
が浮かんだ。NGO の実
がる JVC の役割とはど
創られる。熊岡さん、こ

新代表理事

谷山 博史

過程に関わった。各国はばらばらに進んでいた活動とその理念を括る努力を行なった。一つの柱として、自然環境を壊さずまた収奪せずに、①長く調和的に付き合っていくける農業の方法（たとえば自然農業、有機農業、複合農業など）と、②地域での助け合いの考え方と仕組み（たとえば冠婚葬祭互助組合、コメ銀行や牛・豚・鶏銀行、小規模貯蓄・貸付グループ活動など）を広げていくことを軸とする地域開発を据えていくことが確認された。また協力の相手として、すでに自らの意思と足で立ち上がっている自覚的かつ自発的な人々と連携していくことも確認した。

具体的には、現地域行政との関係が悪化したエチオピアからの撤退、タイでの活動の基本的転換（農村地域での直接的な協力活動から、タイ NGO と連携してのノンジヨク自然農園の運営・研修、タイ農村での日本人の研修に重点を置くこと）を図った。タイの市民社会の成熟、NGO/CSO の発展を受けて、対等な関係のなかで、「農」と「食」を大事にする運動を広げていくという、交流・連携型の運動の流れが、JVC 誕生の地であるタイで生まれた。

農村地域開発の分野での苦闘と平行して、「冷戦構造」型ではない、新たな地域紛争にどのように関わ

るかを模索していった。あるいはもっとも古典的ともいえる冷戦型紛争である、朝鮮半島においては、九五年の北朝鮮の大雨洪水を契機として、インドシナでの紛争解決をいくらか教訓としながら、人道支援を入口として関わろうとしていった。国の体制や指導層と一般の人々の欠乏や苦悩を分けることで人道的なアプローチを行ない、その具体的な活動から平和や安定への展望を作ろうとした。この試みは、今「子ども絵画展」（子どもの絵とメッセージの交換）ということ、日本―韓国―北朝鮮の学校と子どもをつなぐ回路として活かしている。

新しい時代の新しいタイプの紛争への対応を図りかねているうちに、前記の「九・一一事件」と遭遇した。以降は、これをもって戦争・軍事攻撃に持っていくとする米国現政権などによる「戦争政策」に明確に反対しながら、直接の被害を受ける人々への人道支援を展開した。〇一年十月以降のアフガニスタン東部での活動では、外国軍による「人道支援」とそれがもたらす混乱が、本来の人道支援機関である、国連専門機関や NGO への攻撃としても跳ね返ってきている。イラクにおいても住民虐殺などが続く堪え難い状況の中、JVC は隣国ヨルダンに拠点を移して活動せざるを得なくなった。

こうした状況の背後には、「冷戦構造」の崩壊後の世界の変化がある。世界は、巨大な多国籍企業を頂点とする、経済・金融統合（グローバルイゼーション）と、「弱肉強食」型経済の否定的な影響を広げつつある。JVC は、この時代の流れにしっかりと対峙し、小農や小さな民（私たちもその一人）の視点からの地域開発活動と、平和への希求を結びつける努力をしていく。

■いっそうの前進を

代表理事としての反省となると山ほどある。状況として心配な部分は、九〇年代と比べても危険が増した紛争地での活動状況を、構造的にだけでなく、スタッフ・現地協力者の安全の観点から具体的にどう判断し決断するかが問われている。永遠の問題ではあるが、遠くから見ると危険は拡大して見え、現地で動く人には「色々あるが何とかなるだろう。自分は現地状況と、危険の切り抜け方も熟知している」という自負がある。また、事務局の雰囲気も、論客の多かった八〇〜九〇年代と比べ、大人しく優等生的になったと感ずる。活力の集中も課題である。技術的な側面もあるが、JVC/NGO/CSO 活動の理念的整理と展開、また組織整備も、谷山さんのもとで飛躍的に確立していくことだろう。

「JVC」のこれまでの歩み

熊岡

谷山

八〇・タイでJVC創設に参加

・カオイダン難民キャンプで
技術学校開設

八二・シンガポール・UNHCR
難民キャンプを運営

八二・JVCタイ事務局長（〜八三）

八三・初めてカンボジア国内を訪問、
井戸掘り給水活動開始

八五・カンボジア国内に事務所開設、
同代表（〜八八）

・井戸掘り、技術学校、母子保健活動、
孤児院支援など



八六・カンボジア国際NGOフォーラム
執行委員（〜九二）

（※母子保健センターの
建築に励む姿）



八九・JVC副代表

九〇・JVCベトナム事務所代表
（〜九二）

・帰還難民のための職業訓練、
子どもセンターでの識字教育や
技術訓練など

八八・JVCラオス現地代表
（〜九二）

・農村で女性生活改善普及
員の研修を実施



八六・カオイダン難民キャンプ
で技術学校担当

九一・インドシナ地域調整員II
各国間調整、農民交流、情報共有などを促進

時代は私とNGO／「JVC」 何を要請しているか

新代表理事 谷山 博史

■時代をどう見るか

今、NGOはとても厳しい状況におかれています。NGOの立ち位置が見えにくくなっているのです。それは一言で言ってしまうと、民営化（Privatization）と基準化（Standardization）という二つの、しかし相互に補完し合うルールが世界の隅々を覆うようになっているからです。これは「経済のグローバル化」の一つの帰結です。

経済活動のみならず社会事業さえもが民営化され、しかも厳しい国際スタンダードが課されます。NGOは国際スタンダードのもとで民営化（ここでは民間企業という意味ですが）と競争するということ不思議な現象が起こっています。「国際スタンダード」を直接管理するのは国ですが、元締めはアメリカです。つまり、アメリカ—各国政府—民間・NGOという支配の系列化の中にNGOが取り込まれていく流れがあるといえます。

同時に社会の様々な領域の軍事化が進んでいます。ここでの「軍事化」とは、教育、情報、福祉など様々な経済・社会活動が軍事的目的に利用される体制になることを言いますが、その中で国際協力の活動までが軍に協力せざるを得ない状況が作られつつあります。

「軍事化」は政治権力の持つ体質とも言つべきもので、いつの時代、どの国にも見られる現象です。しかし「民主的な社会」にあつては市民的な抵抗としての市民運動や市民の政治参加の結果としての制度化によってこの権力の膨張に足枷をはめることができていました。しかし権力に足枷をはめるどころか、いつの間にか市民活動の方が足枷をはめられてしまいました。

■アフガンから見る世界

私はJVCに入ってから二十二年、海外現場の駐在と東京勤務をほぼ等分に行ったり来たりしてきました。最後の現場はアフガニスタンで、四年と二カ月の滞在になります。アフガニスタンの現状は、先に述べた世界の趨勢を象徴的に語っています。そしてアフガニスタンから見ると日本の現状もまるで写し絵のように似通って見えます。アフガン政府は、まだ力が弱いとはいえ、いえる力が弱いからこそ、復興・開発事業のあらゆる場面で

NGOにガイドラインを課そうとしています。このガイドラインは皆アメリカを始めとする援助国や世銀などから来ているアドバイザーが作ったものです。アフガン政府はこの「国際ガイドライン」を振りかざしてNGOを管理します。保健、農村開発、給水、教育といった分野でこの傾向は著しい。NGOをガイドラインで管理し民間会社と競争させます。復興・開発事業を入札と委託という形式で統制しようとする流れにあるのです。

また、NGOは無駄が多く不効率であるというNGO批判の世論を背景に（というより世論を煽り立てて）、NGOに流れていた国際援助資金を国家財政への直接支援に変えさせようとしています。活動現場に深く根をおろし、よほど住民との信頼関係を築いていなければ、またアフガン政府の課するガイドラインに対して批判的な精神を持って現場の実情に処していなければ、NGOは単なる下請けになりさがってしまいます。

アフガン政府にがんじがらめにされ、アフガニスタンの人々の批判の矢面に立たされて、アフガニスタンで活動するNGOは今アイデンティティ喪失の危機的に立たされています。「NGOとは一体何なのか、誰の意思を代表して活動するのか、NGOの原則である中

(※〇〇年、子どもセクターを行政に移譲)

九二・JVCカンボジア現地代表(一九三)

・難民帰還車両整備、技術学校運営、農村開発など



九三・『カンボジア最前線』出版

九三・カンボジア市民フォーラム創設(事務局長)

九五・JVC代表(一〇六)

(この後、JVC各活動地を含む多くの国々の現場を訪問、国際会議に多数参加)
・外務大臣表彰(インドシナ難民救援/個人として)

九六・北朝鮮への緊急食糧支援Ⅱ
WFPとともに十カ村で配給を実施



九六・ルワンダ緊急救援(一九七)

九八・カンボジア選挙監視に参加

九九・ユーゴ/コンボへの緊急救援に参加

〇二・イラク戦争ストップをアピール(一〇三)



〇六・代表交代



九三・在カンボジアのままだJVC事務局長を兼任

九四・帰国、JVC事務局長専任(一〇二)



(この間、市民フォーラム二〇〇一理事、カンボジア市民フォーラム世話人、地域の開発協力推進会議(CDD Japan)事務局長、NGO非戦ネット立ち上げ世話人などを歴任)

〇二・JVCアフガニスタン現地代表(一〇六)

・〇一年の空爆直後の緊急支援に始まり、地域保健医療や給水事業を展開



立性は本当に実現可能なのか」という問いかけがなされているのです。

さらに深刻なのは、対テロ戦争の現状です。対テロ戦争はアフガニスタンで始められました。「テロリスト」を匿ったタリバン政権を倒し、自由と民主主義を確立するための戦争だとされました。

しかし現在、タリバンの攻勢は益々激しさを増し、地方ではタリバンが実効支配する地域が序々に広がっています。南部や南東部の地域では、タリバン掃討作戦を行なうアメリカ主導の連合軍のみならず、国連決議下で治安面での復興支援のために派遣されたはずのISAF(国際治安支援部隊)までが住民を敵にまわしてしまっている状況です。このような状況下で、治安が悪いことを理由に軍が復興支援を行なう仕組みが導入され(PRT=Provincial Reconstruction Team)、NGOさえが軍と一体となって活動するケースが増えてきています。

■時代とNGOをどうつなぐか

「今という時代はどが狂ってしまったのか」という問いかけと、「NGOとは何なのか」という問いかけとは表裏一体のもので、この問いかけの先にしか今という時代におけるNGOの役割は見えてきません。そして私たちの信じる未来の希望も。

経済のグローバル化と軍事化という時代の趨勢に共通する特徴は、「強者の押し付け」という言葉で表せると思います。民営化や国際スタンダードに関して言えば、国による規制や指導による押し付けが撤廃されるという意味では自由化という側面も伴っていますが、市民や小事業者にとっては国よりさらに大きな力

による押し付けにさらされることを意味します。

アフガンの人たちはどうでしょう。地方の現場から見ていると、国際援助機関が復興の名の下に導入しようとしている価値観と現地の人たちの価値観との間に微妙なずれがあり、これが欧米の押し付けと映ります。そして復興と戦争が同時に行なわれているために、欧米の価値観が武力によって押し付けられているとさえ見られるのです。

JVCは海外の現場と日本の双方において、多様な価値観が共生できる社会を目指して活動してきました。そして地域の自然環境と文化の総体としての風土に根ざした地域づくりを標榜(ひょうぼう)してきました。自然農業に関わるときは、イデオロギーとしてではなく、近代農業の効率主義や自然破壊に抗して土地の風土と生活を守って生きようとする人々の武器ととらえてきました。緊急支援と復興支援においては、単にサービスを提供するものとしてではなく、紛争や災害の原因を見据えながら復興過程における住民の尊厳と主体性を励ますことに力点を置いてきました。これらは例に過ぎませんが、すべての活動においてこの基本スタンスは変わらなかったと思います。

この基本スタンスは今後のJVC

Cの活動にとって益々重要なものになってくるでしょう。世界と日本の現実には、人々が多様な価値観のもとに地域の風土に根ざして生きていくことを益々難しくしていくからです。NGO、特にJVCにとって重要なことは、活動を通して地域の人たちがいきいきと生きるオルタナティブ(代替)の事例を積み上げ、そして広範なネットワークを通してオルタナティブな活動を目指す人々の運動をつなぎ、力ある声として社会と政策に提示することです。

JVCはこの課題を実現するに足る次の三つの特徴を持っています。

- ①海外現場での支援活動と同時にアドボカシーにも力を入れている
- ②海外の住民運動と日本の住民運動をつなぐことに力を入れている
- ③JVC自身が組織としてネットワーク性を強く持っている(JVCは組織の運営がネットワーク的であると同時に、次々に外にネットワークを作っていくという性格を持っている)

現場と政策をつなぐ、住民運動をつなぐ、NGOをつなぐという三つのネットワーク性がJVCの最大の特徴であり、強みです。私はこの危機の時代にJVCの持っている資源を最大限に生かして外に打って出ることが代表として最も求められることだと思っています。

JVC 新旧代表へのメッセージ

この度の代表交代にむけて、日本各地の会員の方々からメッセージをいただきました。

to熊

to谷

熊岡代表とは、カンボジアの農村見学をご一緒しました。そのとき、会報や新聞で読ませていただく代表とは違った、お母さまの健康をご心配されている暖かい「熊岡代表」にお会いしました。

谷山さんは姫路に来てくださいました。目の奥からこちらを見据えておられるような、また、「なんでもわかってるよ」と言っておられるような印象をうけました。

熊岡代表に「本当にお疲れ様、そしてありがとう」と、谷山新代表に「これからのJVCをよろしく」とお伝えしたいと思います。

藤原 殷子（兵庫県）

to熊

いつも気軽に声をかけてくださる熊岡さんの優しさ。ふいに飛び出すユーモア。確固たる信念を持った圧倒的な存在感。将来についてご相談した際も、焦らずに足下を固めることをアドバイスいただきました。

物質的な支援ではなく、自立を促すJVC。一人ひとりが実践することを重視するJVC。熊岡さんと、JVCのこれからの活躍ご発展をお祈りしています。

小久保 啓（神奈川県）

to谷

谷山さんの真摯さ・誠実さは、言語や文化を超えて、現地の人たちと協力し合い、どんな困難な状況にでも打ち勝つお力の源と思っています。

JVCを含めたNGOを取り巻く環境は様々に変化していると思いますが、新代表として、ハートフルなタフさで切り開かれることとご期待申し上げます。今後も応援しています！

福井 貴久子（神奈川県）

to熊

熊岡さんとは最初、取材者として出会った。八〇年代前半、「救援」か「開発」かを巡って、JVC内は二分されていたと思う。

当時、スタッフは昼食代を節約するために事務所の狭い流し台でうどんを作ってみんなで食べていた。そこまでする動機を聞いたところ、「自分が恵まれた境遇であることがわかるからではないかな」というようなことを語った。

JVCの活動家たちは貴族ではなく、ほとんどが中産階級だったが、自分の貯金をはたいてアフリカで活動ができるかどうか調査に行くような若者は、すでに八〇年代の若者の中では珍しかった。

JVCは九〇年代に入って、どんな「開発」路線が進んだが、アフガンスタンやイラクに戦争が起り、やっぱり「救援」をやらざるを得なくなりました。これができたのは、熊岡さんをはじめとする第一世代の「救援」のDNAではないだろうか。

さて、熊岡さんである。JVCを退いて、一体何をやるの？「あつ」というようなことで、私の先達になってください、とまた期待してしまつ。いやいや、もう解放してあげましょう。本当に熊岡さん、ご苦労様でした。

村田 恵子（埼玉県）

to谷

思えば事務局長から国際協力の前線に向かわれて、また谷山さんのお嫌い(?)そんなデスクワークがお仕事を中心になってしまいそうですが、頑張ってください。

上仙 純也（北海道）

to熊

もう十年以上前になるのでしょうか？札幌在住時、熊岡さんが来札され、カンボジアの現状（内戦直後）を拝聴したのは…。一緒に二次会に行つた覚えもあります。新旧代表含

め、世界の全スタッフをこれからも応援させていただきます。

正木 庸子（東京都）

to谷

JVCを通じて、社会奉仕だけのボランティアの姿を越える社会活動があると確信するようになりました。谷山さん！大変だけど、人間的な、社会変革的なJVCの姿をもっともつと発信してってください。

木瀬 慶子（東京都）

toJVC

イラクが戦場になるぎりぎりまで反戦キャンペーンをはったこと、熊岡代表の要所での声明、世界中の人々の平和を求める声、それらが印象に残っています。

十四年、JVCの「T&E」を読んできて、いまだに紛争はなくならないけれど、現場で一つずつ確実に平和への足がかりを築いているスタッフに、そこに住む人々に、希望を見いだしています。

川元 文枝（鹿児島県）

※この他にもたくさんのお声をいただきました。ありがとうございました！

- 05/09 六者協議で共同声明採択
- 11 国連総会が「北朝鮮人権決議案」を採択
- 11 KEDO(朝鮮半島エネルギー開発機構)、軽水炉事業終了で合意
- (12 ソウルで「東北アジア子ども平和絵画展」開催)
- 12 平壤駐在の国際NGO 撤退
- 06/01 WFP(世界食糧計画)が食糧支援を停止
- 01 アメリカが対北朝鮮金融制裁を強化
- 02 北朝鮮とWFPが食糧支援案に合意
- (05 ソウルで「東北アジア子ども平和絵画展」開催)
- 05 WFPが食糧支援を再開
- 06 日本で北朝鮮人権法が成立
- (06 東京で「南北コリアと日本のともだち展」開催)
- 07 北朝鮮ミサイル発射
→日本の経済制裁発動、国連安保理での非難決議
- 07 北朝鮮にて大雨洪水の被害
- (08 平壤で「子ども絵画展」開催)

思いやる心を積み重ねて

KOREA こどもキャンペーン
事務局長

筒井 由紀子



子どもたちの想いを絵に乗せて人と人をつなごう、という「南北コリアと日本のともだち展」。7月に東京で開催し、8月下旬には平壤でも無事終わった。北朝鮮のミサイル発射訓練の強行、国連安保理での非難決議採択、相次ぐ日本政府の経済制裁など、政治に振り回され、悪化する両政府間の関係を縫ってやっとこぎつけた成果だった。そして10月始め、北朝鮮政府の核実験発言をめぐって緊張が高まっている。こうした状況下、今を生きる普通の人々のまなざしを大切にすることこそが平和をつくる、そんな思いで積み上げられてきた「ともだち展」の意義が、いっそう高まっている。(編集部)



■「アンニョン(こんにちは)と元気に手を振る男の子たち。」

KOREA こどもキャンペーンとは

北朝鮮の子どもたちへの人道支援を目的として96年に発足。食糧支援や太陽光発電パネルの支援と同時に、北朝鮮の子どもとの絵画交流に取り組む。現在、アーユス＝仏教国際協力ネットワーク、地球の木、JVCの3団体で構成。

TEL: 03-3834-9808 FAX: 03-3835-0519

「本当に絵画展が開催できてよかった。今年はもう無理かなと思いましたが、でもあきらめきれなくて…」という私の言葉に、ルンラ小の校長先生は強く私の手を握り「あきらめないで続けましょう」と励ましてくれた。北朝鮮の人たちもこの絵画展を応援してくれている。あしかけ六年、学校訪問は十回を超えるだろうか。積み重ねの重みを感じる瞬間だった。

日本から北朝鮮に対するものと同じくらい、いや、それ以上に北朝鮮での日本への風当たりは厳しい。絵画展の開催どころか訪朝自体も危ぶまれたが、現地の受け入れ先と頻繁に連絡を取り合った結果、平壤展は現地の小学校に暖かく迎え入れられた。

現在、北朝鮮に少しでも関わる事業はどれも風前の灯だ。両国の人たちにとって、「当たり前」に日々を生きる「相手を知る機会」はほとんどない。だが、この絵画展を通して、北朝鮮の子どもたちが日本を知り、私たちも彼らを通して北朝鮮を知ることができる。

五月に訪朝して、東京展のために等身大の自画像を送って欲しいとお願ひした時、校長先生から「こちらにもぜひ、日本の子どもたちの作品を持ってきてください」と言われた。今回持参した絵には、日本の子どもがハングルで名前を書いていた。先生たちは「はる・か」と読み上げ、「まるで日本の子がいるみたい」と喜んでくれた。子どもたちも楽しそうに、作品の前でポーズをとっておどけていた。

* * *

五月に訪朝して、東京展のために等身大の自画像を送って欲しいとお願ひした時、校長先生から「こちらにもぜひ、日本の子どもたちの作品を持ってきてください」と言われた。今回持参した絵には、日本の子どもがハングルで名前を書いていた。先生たちは「はる・か」と読み上げ、「まるで日本の子がいるみたい」と喜んでくれた。子どもたちも楽しそうに、作品の前でポーズをとっておどけていた。

* * *

平壤市内は、概して穏やかであった。七月の大雨で街の中心を流れる大同江も増水し、その影響で「アリラン祭典」も中止になったというが、家族連れがレストランに行列を作ったりするなど、いつもの夏と変わらない街の風景である。

しかし、北朝鮮を取り巻く国際情勢が厳しくなるにつれ、北朝鮮

が周りに築く壁はいっそう高くなっている。昨年末、北朝鮮政府の要請により国連機関の援助活動は大幅に縮減し、現地に駐在していたNGOも撤退している。今夏の大雨により大きな被害が出たと聞いていたので朝鮮赤十字会を訪問したが、話は公式発表の域を出なかった。これまで支援で訪れたことのある地域にも被害があると聞いたが、被災地へのアクセスも厳しく制限されていて、支援活動にとりくむのは難しい。

* * *

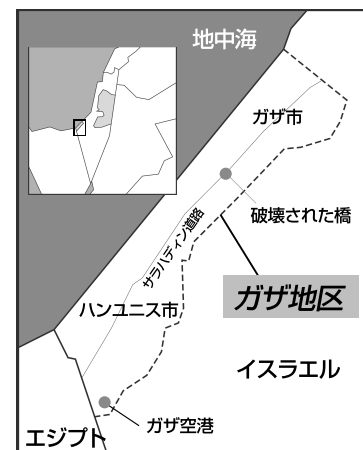
日朝関係は「対決の局面」に入ってしまったと言われる。しかし、「毅然とした態度」や、勇ましい言葉の応酬の後に来るであろう「争い」や「混乱」について、私たちはどのくらい具体的に想像をめぐらしているだろうか。それは今まさに、アフガニスタンやイラクで毎日のように起こっているようなことではないのか。

隣国ゆえに、日本でも多くの人が刻々と悪化する状況に不安な毎日を送っている。隣り合って住む私たちは、みな「当事者」であることから逃れられない。「KOREA こどもキャンペーン」は、「当事者」として地域の平和を願い、市民と市民をこれからもつないでいきたいと思う。

現地報告 隠される人道危機

——イスラエル攻撃下のパレスチナ・ガザ地区——

パレスチナ事業担当 藤屋 リカ



この苦難はいつまで続くのか——。

2006年7月、イスラエル軍が国境を越え、レバノンに陸と空から攻撃を仕掛けた。この動きに世界中の耳目が集まったその陰で、パレスチナの人々の暮らしは、ますます厳しさを増していた。イスラエルの攻撃によってガザ地区では電気も水も途絶え、子どもたちに栄養失調が拡大した。そのときJVCは…。現地で人々と苦難をともにした藤屋リカが報告する。(編集部)

■ 終わりになき苦難

パレスチナ・ガザ地区。地中海に面する、縦四十キロ、幅十キロにも満たない地区に百三十万人以上の人々が暮らしており、その八割以上を難民——四八年の第一次中東戦争で現在のイスラエル領から逃げてきた人々とその子孫——が占める。六七年の第三次中東戦争以降、ガザ地区はイスラエルに占領され、多くの住民はイスラエルへの出稼ぎによって生計を立ててきた。

九三年のオスロ合意によりパレスチナとイスラエルは和平に向かうかと期待されたが、その後イスラエルによる封鎖政策は厳しくなった。二〇〇〇年に第二次インティファダ（民衆蜂起）が始まり状況はさらに悪化、〇五年には一人当たりの国民所得は九九年の約半分にまで落ち込んだ。ガザ地区の空港や港もイスラエル軍により破壊された。

昨年夏、ユダヤ人入植者と軍はガザ地区から撤退したが、境界・空・海はイスラエルの管理下にある。住民は地区内から出ることもさえ困難な状況にある。地区内への物資の出入りもイスラエルが管理し、特に今年一月以降、物流検問所は断続的に封鎖されている。

今年の一月のパレスチナ評議

員選挙で民主的に選出されたハマスによる政権発足に伴い、イスラエルは代理徴収している関税等のパレスチナ自治政府への送金を凍結、米国とヨーロッパ連合も自治政府への直接支援を停止した。これにより、パレスチナ自治区の貧困率^{※①}は六七%になり、失業率は約四割にも及ぶ。四人に一人の生活を支えている自治政府の職員の給与は、三月以降ほとんど未払い状況が続く。

特にガザ地区の状況は厳しい。パレスチナ自治政府統計局によると、四〇六月の貧困率は八七・七%にもなる。生活物資の不足で物価は高騰、住民の生活を圧迫した。乳幼児の栄養状態の悪化など、社会的弱者にも悪影響が出ている。

■ 道路も水も電気も

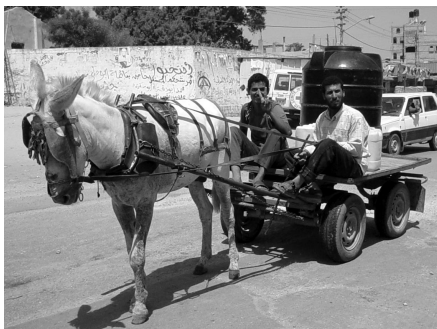
そして六月。ガザ地区では、イスラエル軍によるパレスチナ武装勢力への暗殺攻撃によって子どもを含む住民が巻き込まれる事件が多発した。特に、海岸で家族七人がイスラエル軍の砲撃とされる爆発で死亡する事件もあり、パレスチナ人の悲しみや怒りは高まっていた。六月末、パレスチナの武装組織がイスラエルの軍事基地を襲撃、イスラエル軍兵士二人を殺害し、一人を捕虜とした。イスラエルの刑務所

に収監されているパレスチナ人の解放を要求したが、イスラエルはこれを拒否し、イスラエル兵の救出とパレスチナ武装勢力の手製のロケット弾の掃瞄を目的としてガザ地区へ侵攻した。侵攻は現在（九月末時点）も続き、これまでに二百人以上のパレスチナ人が死亡、半数以上は武装勢力とは関係のない市民であり、多くの子どもも巻きこえられている。

侵攻の初期にイスラエル軍が拠点としたのは、〇一年にイスラエル軍によって破壊され封鎖が続くガザ空港だった。この空港は日本からの多額のODA（政府開発援助）によって建設され、九八年に開設したばかりだった。空港の近くは貧しい農村地区だが、侵攻のために農地は戦車の通り道となり、一部の家屋は破壊された。家を失った八人の子どもの父親は、自分の家族は武装勢力とは関係がないと語り、「どうやって生活していったらいいのか」と途方にふてていた。

ガザ地区の南部と北部を結ぶいくつかの橋も破壊された。日本政府はUNDP（国連開発計画）を通して、ガザ地区の中央を縦断するサラハディン道路の修復支援のために千九百万ドルを拠出してきた。日本のODAでの補修対象であるこの道路に架か

注① 貧困率：一日2ドル以下の生活を強いられている人々の割合。



■生活用水を運ぶロバの荷車



■空爆によって破壊された橋



■栄養食を準備する母親たち



■水汲み場に殺到する人々

る橋も破壊され、補修どころではなく再建が必要になってしまった。これらの橋はワディ（枯れ川）に架かっていて、夏は乾季で橋の横の道を通れるが、冬の雨季には水が溢れて通れなくなる。巡回診療で地区内を回っている看護師のハナンは、「完全に破壊された橋がすぐに修復できるとは思えません。冬に川が渡れなくなると、人々が病院に行くことさえ困難になることが心配です」と言う。

また、イスラエル軍は地区の約半分の電気をまかなっている地区唯一の変電所を空爆した。これによって地区内では停電が頻発し、浄水施設も機能しないために人々の生活用水さえも不足した。南部のハンユニス市の公営の水汲み場には、空のペットボトルを持った子どもからロバの荷車にタンク乗せた人までが殺到した。

今、ガザ地区は人道的危機に陥っている。国際人道法によって、戦時下及び占領下の文民の権利は保障されており、前述のような民生施設の破壊は国際人道法に違反する。また、「集団懲罰」も国際法において禁じられている。イスラエルの人権団体も、変電所の破壊とそれの伴う悪影響は戦争犯罪との見解を発表している。

■栄養失調の子どもたち

子どもたちにとっても状況は厳しい。スイカは子どもが楽しみにしているおやつで、スイカを積んだロバの荷車はガザの夏の風物詩である。しかしこの夏は、スイカを積んだ荷車は父親たちに追い返されてしまった。安いスイカさえ買えないので、子どもがかわいそうとの理由だった。おやつどころか一日に一回食べられるかどうかだと語る母親もいた。献立は安価なジャガイモとトマトの繰り返しで、肉屋から骨をもらってきて味をつけるなどして、子どものために工夫をしていた。

JVCでは〇三年からガザ地区の幼稚園で栄養改善支援をしている。今年の二月以降、幼稚園の月謝が払えない子どもが急増した。朝食を摂れる子どもは約一割しかおらず、幼稚園に食料援助を頼みに来る親もいた。

四月、子どもの栄養を専門とする現地のNGO「人間の大地」のセンターで栄養失調児の来所者数が倍増したことから、JVCは「人間の大地」と協力して五月から緊急的な栄養支援を開始した。内容は「人間の大地」のセンターでの栄養失調児への栄養食の提供と母親への栄養指導で、食材、栄養指導と調理担当の看護師の人件費、母親がセンターに来るた

めの交通費も支援している。栄養食は、ガザ地区内で入手できる季節の新鮮な食材を用いたものを一日二度子どもたちに提供している。安価で手に入りやすい野菜や豆、芋、それに栄養のために肉も加えたスープと季節の果物のジュースだ。また、母親は入手可能な材料での栄養食の作り方や栄養について学んでいる。当初三カ月の予定で支援を開始したが、六月末からの状況の悪化に伴い、十一月末まで延長、その後も検討が予想される。

JVCも加盟するパレスチナで活動する約七十の国際NGOの連合体AIDAでは、ガザの人道状況の実態調査結果を報告、改善に向けての声明を五月に出した。JVCとしては、日本政府にイスラエルの軍事侵攻への抗議の要請書を提出し、また、AIDAから出されたガザの民間人の保護及び人道状況の改善に関する声明を日本に発信した。

緊急支援のたびに、「このような支援をしなくても良い時がいつ来るのだろう」と感じずにはいられない。目の前の子どもたちが一人でも助かることを願いつつながら彼らとともに働いているが、同時にこの状況が社会構造から改善していくように声をあげながら関わらなければならぬと強く再認識させられる。

注② 集団懲罰：弾圧などが実施される際に、その対象の周辺に存在する、対象と無関係の人々に対してまでその被害・影響を及ぼすこと。

スタッフのひとりごと

子どもと歩く通学路

アフガニスタン事業担当 長谷部 貴俊

8月末から4週間近くアフガニスタンに出張に行っていました。ますます治安の悪くなるアフガニスタンですが、3回目の出張だったので、気を張りつつもどこか慣れたところもありました。

いろいろな業務に集中する毎日でしたが、なんとなく気になることがありました。それは6歳になる長男のことでした。今年から小学生になりましたが、同じ幼稚園から同じ小学校に行った子どもが他に誰もいなかったせいか、入学式直後から私に朝、小学校までついてきてほしいと

言うようになり、自分の子どもと近所の子とも4、5人でいっしょに毎日、学校まで行くようになりました。20分くらいの道のりですが、子どもたちと、たわいもないおしゃべりをしながら行っていました。あるとき、「パパ、もう行かなくとも、友達と行けるかな?」と聞いても、心細い顔をしていたので、結局1学期の終わりでいっしょに行っていました。

2学期が始まるときに、私はアフガニスタンにいたのですが、長男は「友だちとだけで大丈夫。ママはついてこなくていいよ」と言ったそうです。



出張から帰ってくると、もう「パパ、いっしょに行こう」と言うこともなく、近所の子ともたちと元気に行くようになりました。良かったなと思う反面、どこかさみしい気持ちもありました。

後日、近所の方から聞いたところ、1学期の間ほぼ毎日子どもたちと歩いていたおかげで、恥ずかしいことに私の顔は子どもたちのお母さんの間で有名になっていたそうです。

『ザ・コーポレーション』

みるよむきく



監督・マーク・アクバー、ジェニファー・アボット 145分

「資本主義社会サバイバル・シネマ」と銘打たれたこの映画は、現代の大企業の活動に関する数十人へのインタビューと、企業活動の主に負の側面の事例とから構成されるドキュメンタリーだ。公共の利益のために生まれたはずの企業が、法人格の取得を経て、現代では政府をも超える力を持つ「人格障害」者にまで変貌した、という文脈である。

「資本主義社会サバイバル・シネマ」と銘打たれたこの映画は、現代の大企業の活動に関する数十人へのインタビューと、企業活動の主に負の側面の事例とから構成されるドキュメンタリーだ。公共の利益のために生まれたはずの企業が、法人格の取得を経て、現代では政府をも超える力を持つ「人格障害」者にまで変貌した、という文脈である。

この映画では、大企業は数々の悪行を働く悪者だ。これに対する外部からの働きかけも例示される。政府による規制やCSR/SRIから不買運動まで。加えるとしたら、「製品ではなくブランドイメージを販売（製品自体は外部生産）する」大企業に対しては、必要であれば「ブランドイメージの不買運動」——私たち消費者自身に強く植え付けられている無限の「成長・誇示・所有・消費」への欲

（CSRのISO化はまゆつばだが、それを達成できる企業は少なくとも「悪役」ではなくなるだろう。この映画は、そんな「もうひとつの企業」が増えるきっかけになるかも、とも思わせてくれる良質のドキュメンタリーだ。

（会報誌レイアウト 細野純也）



タイ

■スマトラ島沖津波

被災地支援

スマトラ島沖地震による津波によって被災したタイ南部6県を対象に復興支援活動を実施。被災した在タイビルマ

人労働者の子どもへの健康教育・医療支援を続けている。
他方、ビルマ人遺族へ遺体返還が滞りなく行なわれるよう、また、遺体返還後にタイ政府から見舞金がきちんと支払われるよう遺族への調査活動を通じた政策キャンペーンを実施している。ビルマ人遺族の精神的な復興を後押しするための遺体返還後の葬儀支援もあわせて行なっている。こうした活動を通じて、7月にはタイ政府から初めてビルマ人遺族7人に2万バーツの見舞金が手渡されるといった成果が見え始めている。さらに、タイ国家経済社会評議会に協賛し、タイ国の災害警報システムの評価と防災対策のセミナーを8月22日に実施した。(堤)

■交流・ネットワーク

これまでのタイ事業がもっていたネットワークを活かしながら、「地場の市場」のその後の動向を追うことを目的に、タイの農民が日本の農の取組みを学ぶ際に協力する。9月中旬からタイのNGOスタッフが来日する際にも協力予定。(下田)



■災害警報システム・防災セミナーの様様。



カンボジア

■持続的農業と農村開発 (SARD)

安全な水や食糧の確保を目指して94年から活動。活動地のオンスノール郡では田植えも始まり、コメ銀行への資本米の返却の見通しが立ってきた。新活動・調査地であるシェムリアップ県では、農民生活基礎調査を実施し、現在集計作業を行なっている。(山崎)

■資料・情報センター (TRC)

持続的農業、農村開発の資料を95年から提供。農村地域での資料センター開設に向けて、他NGOのコミュニティー図書館への関連図書の提供を準備中。農民が持続的農業、環境などに関する資料をどの程度利用するかを確認するため。(山崎)

■技術学校

自動車修理の職業訓練校・寮と付設整備工場の運営強化。経営改善のため、日本の企業コンサルタントの経営診断を受けられるよう協力。プノンペン校の移転計画は進展なし。(米倉)

■調査研究・政策提言、ネットワーク

在カンボジアNGO日本人ネットワーク (JNNC) で、国道一号線修復工事の住民への影響について勉強会開催。(米倉)



■研修に参加した息子から習い、幼苗一本植えを実践する老夫婦。



ラオス

■森林保全

土地森林委譲(村の共有林を正式に村のものとして登記する)の要請があったソッペン村、バックパナン村への予備調査を終えた。来年1月

に、両村で土地森林委譲を行なう予定である。ラタンの植栽の生育は順調ではあるが、村人のフォローアップ用紙への記録が十分ではないので、村人と協議の上、改善をしていく。8月からは集中的に、土地森林委譲のフォローアップと森林ボランティアの情報を収集している。10月後半には、ボランティア養成のための経験交流を行なう。(賀川)

■複合農業・生活改善

SRI(幼苗一本植え・若い苗を一本づつ植える稲作技術)の生育は、順調である。特に生育のよかったブーン村とラオ村へ他村の農民を連れて行き、経験交流を行なった。今年は特に、1本からどうしてたくさん分けつするのかという理論を農民に説明するようにしている。また、カーンヤンカム村では貧困世帯の詳細な調査を実施し、村の貧困層のためにコメ銀行の特別な規則が作れないかを提案している。(賀川)



■農民同士の経験交流でSRIの写真を手にとり、話をする。



ベトナム

■農村開発 (ホアビン省)

04年から実施している延長期では他国の農家との経験交流を行なっている。8月中旬には熊本県水俣市の有機みかん栽培農家・吉田氏を招き、みかん栽培の経験交流会

を開催した。バクソン村では自給用として、美味しいみかんが採れるナムソン村では現金収入源として、みかん栽培を発展させたいと考えている。今回、村人は害虫の親子関係や接木のコツ、剪定の時季などについて学ぶことができた。一部の村人は早速、接木を試したり、根元の雑草を除去して風通しをよくするなど、学んだことを実践していた。(伊能)

■自然資源管理 (ソンラ省)

住民が自然資源を活かしながら生活改善を目指す取り組みを支援。これまでモデル世帯が中心になって、周辺住民へ果樹の育て方の研修を行ってきたが、いよいよ各世帯へ苗木の配布をはじめた。実践具合を今後見ていく。ヤギを小屋で飼育する方法も順調に普及し、飼料用の牧草も十分収穫可能になった。頭数の増加につれて、住民の関心も強まってきている。(栗原)



■みかん栽培経験交流。「この枝を剪定すると、もっと光が入って実がなりますよ」

アフガニスタン

■女性と子どもの健康改善支援(ナンガルハル県)

◎診療所支援：日中気温が高い当期、マラリア発病や下痢感染症のため訪れる患者が急増し、診察時間が十分に確保できない状態が続いた。8月からは女性医師も配置し、分娩室で正常な出産の介助が可能となった。

◎女性医療従事者養成コース：教室や実習室の窓用カーテンと蚊除けネットの取付けが終了、計画通り8月末ですべての支援が完了し、9月下旬に養成センター主催の贈呈式が行なわれる。

◎伝統産婆の職能向上研修：9月に出産介助キットの配布とモニタリングをシェワ、ゴシュタ、ホギヤニの3郡、4ヶ村で実施。

◎安全な水の供給と衛生教育：ゴシュタ郡とシェワ郡それぞれ45ヵ所の井戸新設工事と利用者グループへの衛生教室が8月末で完了。シェワ郡での活動評価を11月に予定。(本間)

■シギ高等女学校支援

「新教科書指導書利用手法研修」を翌年2月シェワ郡内小学校低学年担当教師対象に実施することを県教育局と計画中。(谷山)

■政策提言・ネットワーク

7月のアフガン国際会議の際にNGO有志で外務省に提言書を提出。アフガン現地調査に基づくNGO報告書が完成。(長谷部)



■女性医師による診察風景。

南アフリカ

■環境保全型農業(東ケープ州)

安定した食料生産と農村地域の復興を目指し、環境保全型農業の普及を行なっている。主食のとうもろこしの収量調査を実施した。在来種による有機・無農薬栽培の環境保全型農業の畑と、南ア政府が奨励しているハイブリット種で農薬・化学肥料を多量に使う畑の収量を比較すると、後者は、前者の10倍の費用がかかるが、収量は1/4しかないとわかり、農民支援のあり方への政策提言の一環として調査結果を州政府に提出した。(津山)

■HIV/エイズ(リンボボ州)

南ア北部で、感染予防、HIV陽性者の自助グループ、訪問介護、エイズ遺児支援を行なっている。HIV陽性者やエイズ遺児を対象にした家庭菜園の研修では、水が少ないところでの畑の作り方を学び、井戸も水道もないエイズ遺児の家で畑をつくる実践を行なった。9月には、訪問介護ボランティアの25名を対象としたHIV/エイズを含む性感染症に関する研修を実施した。今後半年間に渡り、結核、介護の仕方、応急処置など計33日間の研修をする。(青木)



■リンボボ州での家庭菜園研修で、畑のモニタリングを行う研修生。

パキスタン

■大地震被災地支援

地震から10月8日で1年が経過する。住宅再建の動きもまだ緒に就いたばかりであり、課題は山積している。学校や病院もまだテントやシェルターの仮住まいで、町や村が元に戻るには何年もかかるであろう。他方、住宅再建補償金の配布は進んでおり、ゆっくりとではあるが学校、病院や道路の再建が進んでいる(ここバタグラム県では日本のODAがその多くを担っている)。

今被災者が味わっているのは、援助依存体質から抜け出して、自分の足で歩き始める時の苦しみなのかもしれない。JVCトイレは鋼板製で丈夫なため要望が多く、現在までに家庭用890基、学校用47基を完成させ、衛生指導集会の参加者ものべ1万人に達し(9月中旬現在)、現在最終フェーズを迎えている。

事業終了後の持続性を向上させるため、8月末より「パキスタン地域開発の専門家である安野修を現地に派遣した(藤井はアフガニスタンに異動)。トイレ設置過程を住民自治活動にリンクさせ、衛生指導を活発化することによりソフトの面をさらに充実させていく。(藤井)



■鋼板製トイレ。住民の暮らしに溶けこませることが重要だ。

インドネシア

■ジャワ島中部地震被災地支援

日本のNGO、APEXと協力して、ジャワ島中部地震の被災地において衛生環境の整備と清潔な水の供給を目的に、現地NGOであるディアン・デサ財団の復興支援を側面から支えている。これまでトイレ・水浴び場・洗濯場の仮設ユニットを設置してきたが、7月末に半恒久的なユニットに切り替えた。建設に際しては、地域の人をディアン・デサ財団が雇用する形で仕事を進め、その賃金で住民を支援することも図っている。また、地震で壊れたり、泥が湧き出たりして使えなくなった井戸の修復も行なっている。ポンプを用いて井戸の中の泥や瓦礫を取り除き、釣瓶をかける支柱や排水溝などを改修する。この活動でもディアン・デサ財団は材料のみを提供し、住民へ技術指導を行ないながら住民自身が作業を行なう形をとっている。1日当たり約40基が清掃でき、9月15日の時点で約2300基の井戸の清掃を終えた。JVCは7月末に募金活動を終了し、合計で約1142万円ものご支援をいただいた。9月後半に下田が現地入りして最終評価を行ない、支援は9月末で終了する。(下田)



■井戸の修復活動の様子。

イラク

■ガン・白血病医療支援

◎支援会合：今年前半の医療支援の成果を確認し、今後の支援の方向性を相談するための第5回JIM-NETアンマン会合（9月20日）に参加。

バグダッドやモスルからイラク人医師5名、日本から元JVCボランティアの井下医師やJIM-NET代表の鎌田寛医師など3名の医師が参加。イラク国内の治安情勢が厳しい中で医薬品支援が引き続き重要であることを確認した。

◎病院への医薬品提供：JIM-NETでは7～9月の間にバグダッドとモスルの病院向けに760万円相当の医薬品支援を実施した（出荷回数8回）。

このうち150万円分をJVCの負担として実施している。

◎政策提言：医薬品供給を改善するためにイラク保健省などの行政当局が改善策を取るよう訴える政策提言活動を開始。支援先の各病院の医師と連絡を取り、聞き取り調査を行ない、報告書を取りまとめ中（10月に報告書完成予定）。（原）



■JIM-NET アンマン会合に参加したイラク人医師たち。

パレスチナ

■ガザ緊急支援

栄養失調児への栄養食の提供と栄養指導を実施。6月末からのイスラエル軍の攻撃はほぼおさまったが、生活状況は悪化するばかり。センター

に通う栄養失調児と母親が急増、対応に追われている。（小林）

■幼稚園児栄養改善支援

ガザ地区の幼稚園児に牛乳と高栄養ビスケットを提供。新学期は9月より開始。今年度も約500人の園児を支援。（小林）

■トラウマ（心的外傷）を持つ子どもたち治療支援

言語・音楽療法を支援する活動。9月からの新年度は約30人の生徒で開始した。（小林）

■子どもの文化・教育支援

ベツレヘムの難民キャンプのハンダラ文化センターを支援。若者ボランティアが新学期のプログラムを計画、開催中。女性グループの刺繍製品も海外からの注文が増え好調。（小林）

■巡回診療支援

「分離壁」と「イスラエル人専用道路」に挟まれた地域で、医療施設へたどり着けない人々に対する巡回診療・保健指導を行なう現地医療系NGOに参加・支援。（小林）



■7カ月のフィダールちゃん。センターに通い始めて1ヵ月、体重が2キロから3キロに増えた。

コリア

■絵画交流

「ともだち展」呼びかけ人でもあるイラストレーター・黒田征太郎さんとともに、朝鮮学校の学生4名が、8月19日より平壤を訪問した。平壤市ルンラ小学校での展示会のほか、黒田さんのワークショップに参加するなど、有意義な時間を過ごした。また、平壤の子どもたちと山登りや川遊びを通じた交流も行なった。

ルンラ小学校など3カ所で行なわれた黒田さんのワークショップは、絵を描く楽しさを味わうと同時に、絵の伝える力、命の大切さを訴える内容。子どもたちは、話に熱心に聞き入っていた。

平壤での展示は、5月のソウル、7月の東京に続くもの。ソウルや東京の絵画展に参加した子どもたちが平壤に送るために作製した、メッセージつきの傘のオブジェは、大勢の子どもたちに読まれた（写真）。また、平壤の子どもたちは、返事や感想を積極的に書いていた。こうしたメッセージの交換が、日本と朝鮮半島をつなぐ、しなやかな糸となっている。今後、新潟、松本、福岡、埼玉などでの巡回展が予定されている。（寺西）



■日本からのメッセージを夢中で読む子どもたち。

スーダン

■帰還難民支援

（スーダン南部）

メカニックの浜口が任期を終え7月後半に帰国した。8月にUNHCR（国連難民高等弁務官事務所）との間で正式に

事業実施契約を結んだ。それを受けてUNHCR車両の修理・整備をしていくための車両部品を首都ハルツームで調達した。9月からUNHCR車両の修理・整備を始めている。またウガンダの難民キャンプから帰還した若者を4名、現在研修生として受け入れている。メカニックの井谷が彼らに実地研修を施しながら、自動車整備工場での日々の作業に従事している。（岩間）

■井戸づくり支援（ダルフル）

地域の治安情勢は完全に落ち着いたわけではないが、井戸掘り活動のための資材輸送が完了しているので、9月中には開始の見込みである。協力団体「イスラミック・リリーフ」の担当者が9月半ばに現地入りし、治安情勢の見極めと共に開始の可否を判断する予定である。（岩間）



■スーダン人メカニックと共に研修生への実地研修にあたる井谷（右）。

オーストラリアのソリストを迎えて…

東京で『クリスマス・オラトリオ』、 大阪で『メサイア』を演奏します。



■ 05 年大阪公演

JVC 国際協力コンサートは、今年大阪 13 回目、東京 18 回目を迎えます。今回、「初」が 2 つあります。一つは、ソリスト 4 名をオーストラリアからお招きすること。2006 年は日豪交流年（日豪友好協力基本条約調印 30 周年を祝う記念の年）。JVC 合唱団員の紹介により、この公演は、日豪交流年の記念イベントの一つになりました。初めてのオーストラリア人ソリストとの共演です。

もう一つは、東京公演の演目の変更。17 年間、ヘンデルの『メサイア』を一途に演奏してきましたが、今年はバッハの『クリスマス・オラトリオ』に演奏します。それも全曲演奏です。6 部構成で、1～3 部がクリスマスに、4～6 部が新年に歌われる曲です。全曲を一晩で演奏する機会は、決して多くありません。この貴重な機会をぜひお聴きのがしなく!! (コンサート事務局 石川 朋子)

公演当日ボランティア募集!

大阪公演 10 名、東京公演 40 名ほど。プログラム渡し、チケットもぎり、花束受付、駐車場案内…、裏方としてコンサートに参加してください。お問合せは JVC コンサート事務局まで。



大阪公演、東京公演のお知らせ

■ 第 13 回 大阪公演 『メサイア』
12 月 9 日 (土) 午後 4 時開演 いずみホール

■ 第 18 回 東京公演 『クリスマス・オラトリオ』
12 月 16 日 (土) 午後 3 時開演
昭和女子大学人見記念講堂

お問い合わせ: JVC コンサート事務局 石川
TEL: 03-3836-4108 E-mail: tomoko@ngo-jvc.net

国内ひろば

JVC network

管洋志 + JVC チャリティー写真展

「アジア育ち」盛況。

9 月 17 日～23 日 @ 銀座

2007 年カレンダーも販売スタート。

「アジア育ち」 写真: 管洋志



1500 円
(税込)

右記の写真展でも展示され好評だったアジアの情景写真による「JVC カレンダー 2007『アジア育ち』」を 9 月 1 日より販売しています。今回のカレンダーは、ややサイズをダイエット (横幅 3cm 減、重量 100g 減) し、使いやすくしました。

ご利用を心よりお待ちしております。

(カレンダー事務局 荻野 洋子)

JVC カレンダーにたびたびご協力いただいている写真家の管洋志さんと JVC が共催で、チャリティー写真展「アジア育ち」を開催しました。支援先は、ジャワ島中部地震で被災した方々。ジャワ島を長年撮り続けてきた管さんの「支援したい気持ち」が、JVC のジャワ島支援活動に託されました。

会場の銀座 AC ギャラリーには、管さんのファンの方々はじめ、JVC カレンダーをご愛用くださっている方など、500 人を越える方々にご来場いただきました。中には長時間にわたって写真一点一点を噛み締めるようにご覧になっている方もいらっしや、その姿はアジアへの憧憬、今の日本社会へのさまざまな想いを物語っているように思えました。

我々インターン・ボランティア一同もすばらしい写真に囲まれて、新たな仕事ができることを大変うれしく思っています。なお、今回の写真展では展示パネルを販売いたしましたが、その数は 130 点を越えました。また多くの方から募金もいただきました。本当にありがとうございました。

(インターン 遠藤 豊)



募金にご協力ありがとうございます

JVC の活動は、皆さまの募金に支えられています。
JVC への募金は税の優遇措置を受けることができます。

① JVC 募金

JVC の各国での活動に役立てられます。募金先
をご指定いただくこともできます。

口座番号：00190-9-27495

加入者名：JVC 東京事務所

7月計 2,940,402 円

8月計 4,564,275 円

	7月	8月
無指定	123,274円	1,116,595円
タイ	21,000円	22,000円
(津波被害)	5,000円	7,500円
カンボジア	55,600円	21,000円
ラオス	58,000円	14,000円
ベトナム	6,000円	1,000円
南アフリカ	74,000円	16,000円
パレスチナ	891,662円	1,116,180円
アフガニスタン	366,500円	1,019,000円
コリア	24,000円	22,000円
イラク	443,892円	326,500円
スーダン	219,000円	0円
パキスタン地震	5,000円	8,500円
ジャワ島中部地震	647,474円	874,000円

② 犬養道子「みどり一本」募金

JVC 活動地での環境保全活動に使われます。

口座番号：00100-8-212497

加入者名：犬養道子「みどり一本」

7月計 423,862 円 / 31 件

8月計 211,446 円 / 23 件

③ JVC マンスリー募金

銀行や郵便局の口座からの自動引き落としを利用
する手軽な募金方法です。

7月計 1,142,200 円 / 1,001 件

8月計 1,241,700 円 / 1,054 件

編集後記

好きな言葉に「たすきわたし」がある。友人で、循環の地域づくりに取り組む山形の百姓、菅野芳秀が語った言葉だ。山も水も土も、駅伝のたすきのように受け渡されて、今も地域を根っこで支えている。それを次の時代にどう引き渡すか。彼の運動はそこから始まった。今号の特集も「たすきわたし」。百姓のたすきが山と水と土なら、権力も金もない NGO のたすきは「志」と「理想」なのだろうな、と思う（おおの）

新スタッフ紹介

小林 和香子
こばやし わかこ

パレスチナ現地調整員



一年半ぶりに JVC に戻ってきました。この間は勉学に励んでいましたが、JVC の現場が忘れられなくて出戻らせてもらいました。今、またエルサレムに住み、プロジェクトに取り組める幸せを噛みしめています。

前回は、とにかく動きまわり、見てまわり、食べまわり（？）、いろいろなものを吸収するのに精一杯で、政治状況の変化にも一喜一憂したものでしたが、今回は、パレスチナの人々のように長い視野と忍耐力を持って、どっしり構えてプロジェクトの調整に励みたいと思います。また、パレスチナの素敵なおばちゃんやおばあちゃん、かわいい子どもたちともアラビア語で会話ができるようになって、刺繍や料理などの伝統や文化にも精通して、パレスチナのことをもっと深く理解して、日本の皆様に紹介できるようにになりたいと思っています。ご支援のほどよろしくお願い致します。

安野 修
やすの おさむ

パキスタン現地調整員



某外資系コンピュータ会社で普通の会社員をしていましたが、農業や国際協力に興味を持つようになり、農村開発の専門家を目指すようになり、その頃 JVC の存在を知りました。

このたび、パキスタン地震被災者支援事業の現地調整員として働くことになったわけですが、同国との関わりは、九四年から九六年のファイサバード農業大学への留学からです。その後、地域研究と称して、または現地の友人と立ち上げた NGO の活動と称して、日本とパキスタンの間を行ったり来たりしました。

自分の人生を振り返ると、本誌の表題（トライアル・アンド・エラー）そのものだった気がしますが、私の場合、結果が失敗ばかり。今後も試行錯誤の連続かと思いますが、今回はプロジェクトの「クローザー」として先発投手の藤井さんの「勝ち」を確定できるよう、がんばりたいと思っています。

2006 年度夏募金にご協力くださいました。ありがとうございました。

この夏も、JVC は多くの方々からご支援をいただきました。お寄せいただいた募金は、アジア・中東・アフリカなどにおける開発協力や人道支援などを通じて有益に使用させていただきます。

2006 年夏募金集計（郵便振替分；9 月末時点）

1,529 件

11,743,839 円

【募金額の一部（20% 以内）は管理費とさせていただきます。また、上記夏募金の金額は、ページ左上の JVC 募金の欄には含まれておりません。】

会員専用ページパスワード（11～12 月） →→→ S9nYx7v2pe

※ JVC ホームページの会員専用ページでは、T&E のバックナンバーを順次公開中です。現在、この作業を手伝って下さる方募集中。細野までご連絡を！

JVC代表交代記念トークイベント

「その時、NGOは。」

～ JVC26年の歩みを、未来へ～

26年前、インドシナ難民の支援をきっかけに発足したJVC。冷戦下の「西」と「東」の政治構造に翻弄される人々に接し、難民キャンプの生活や村の復興を支えてきました。

そして5年前の「9・11」事件から始まった、「対テロ」という名のもとに続く攻撃。アフガニスタン、イラク、パレスチナ…。JVCはその攻撃で犠牲になる人々の嘆きの中にいます。

それぞれの時代の動きの中で、JVCはどう対応し、どう動いてきたのでしょうか。この26年をNGOの目で見続けてきた熊岡、そして谷山が、それぞれの立場から得た教訓をもとに、これまでとこれからの時代、そしてNGOが担うべき役割について語ります。



前代表理事
熊岡 路矢



新代表理事
谷山 博史

【日時】 2006年 11月 3日 (金・祝)
トークイベント 16:00～18:00
懇親会 18:00～19:00

【会場】 文京シビックセンター 26階 スカイホール

【交通】 地下鉄：後楽園駅・春日駅 徒歩1分、JR：水道橋駅 徒歩8分

【参加費】 トークイベント 500円 (JVC会員は無料)
懇親会 2000円

【申込み】 日本国際ボランティアセンター (JVC) 担当：広瀬



日本国際ボランティアセンター (Japan International Volunteer Center) は、1980年2月、タイのバンコクで誕生した市民による国際協力団体です。JVCの活動目的は、国際社会のなかで、社会的、精神的、物理的に困難な立場を強いられるアジアやアフリカ・中東の人びとに協力すると同時に、地球環境を守る新しい生き方と人間関係をつくり出そうということにあります。そのため私たちは、自らの意志でJVCに参加し、活動を継続してきました。JVCはボランティアという言葉で、「自発的意志をもって、責任ある行動をとる」という意味で団体名として使っています。

■JVCでは会員を募集しています。

会員は総会に出席し、JVCの方針などを決定するほか、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・学習会等へ参加することができます。会員の方には年6回の会報誌と年次報告書をお届けします。

- ◎一般会員 10,000円
 - ◎学生会員 5,000円
 - ◎団体会員 30,000円
- ※それぞれに正会員と賛助会員があります。

入会のお申し込み、会員の方のメールマガジンのお申し込み、住所変更などは会員担当の寺西へ。

→ s-tera@ngo-jvc.net

会員数 (10月3日現在) 合計 1,512人
(正会員 699人 賛助会員 813人)

■オリエンテーション(説明会)へお越しください。

JVCの活動内容をご紹介します。お気軽にご参加ください。(無料。予約不要です)

- 第1月曜日 午後7:00～8:30
 - 第2・第4土曜日 午後2:00～3:30
- ※会場はJVC東京事務所です。

■E-mail

info@ngo-jvc.net

■ホームページ

http://www.ngo-jvc.net/

※本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます。
※本誌は再生紙を使用しています。